儒教と共産主義

森三樹三郎

一

このところ「批林批孔」がずいぶん話題になったようであるが、実は孔子批判は今に始まったのではなく、すでに一九一一年の民国革命の当時から行なわれていたものである。

もっとも民国革命のころには、まだ儒教が根強い力を保っていたので、たとえば民国二年（一九一三）に始めて制定された憲法には、「中華民国人民は、孔子を尊び、及び宗教を信仰するの自由を有す」という条項がみえる。一方で孔子を尊ぶといいながら、他方では信仰は自由だというのであるから、なんとも奇妙な、歯ぎれの悪い表現である。これは孔子を尊ぶ保守派と、これを否定する進歩派との、相互の主張を取りいれた妥協の結果だといわれている。

それから三年後の民国五年に、北京大学に迎えられた陳独秀は、雑誌『新青年』を発行した。この雑誌は民国初期の思想界や文学界に絶大な影響をあたえたので有名である。この雑誌の目的は、西洋の民主主義を迎え入れるとともに、儒教思想を徹底的に否定するところにあった。この『新青年』にのせられた論文のうちで、陳独秀は「儒教の忠孝節義は、奴隷の道徳である」といい、呉虞は「儒教は家族道徳を根本とする教であるが、この家族道徳こそ、二千年来の中国民族を苦しめ、奴隷化した張本人である」とし、儒教にたいして激しい攻撃を加えた。

この『新青年』は、初期のうちは民主主義、自由主義を基調としており、まだ共産主義の傾向は見られなかったのであるが、民国八年（一九一九）に起こった五四運動の前後から、急速に左翼的な色彩を強め、翌民国九年には完全に中国共産党の機関誌となった。したがって儒教が共産主義の敵であることは、決定的になったといってよい。

そののち民国十八年（一九二九）になり、蔣介石が北伐に成功すると、孫文の三民主義を国家の根本方針とするとともに、「打倒孔老」を唱えた。これは、やはり五四運動以来の風潮を受けたものと見られる。ところが、蔣介石は次第に共産党との対立を深め、ついには戦いを交えるようになるとともに、右寄りの傾向を見せるようになり、民国二十三年（一九三四）のころから、いわゆる新生活運動を始めた。この新生活運動では、「孔子の教と、孫文の三民主義とは、根本の精神で一致するものである」とし、「礼義廉恥」をモットーと

して掲げるようになった。この礼義廉恥の語の出典は、法家の『管子』であり、ほんとうは儒家の語ではないのであるが、一般には儒教の言葉として受取られている。したがって蔣介石がこの語をモットーとしたのは、ある意味では儒教の精神を復活させたものともいえよう。

しかし、それも結局は一時のことにすぎず、やがて共産主義政権の成立とともに一朝の夢となり、さらには批林批孔となって、儒教はその息の根をとめられることになった。

二

このように中共政権下の中国では、儒教は完全にその姿を消したように見える。しかし、それは果たしてそうであろうか。なるほど目に見える形をもった儒教がなくなったのは事実であるが、目に見えない儒教の精神は、なお根強く残っているように思われる。それは何か。一つには、共産主義一般が儒教と同じ価値観の上に立っていることであり、二つには、中国の共産主義が無意識のうちに儒教の伝統を残していることである。

まず第一点についてみよう。儒教の価値観の特色は、政治に最高の価値を認めて、学問・芸術・宗教などの文化の価値をその下におくことにある。つまり多くの価値を同一の平面におくのではなくて、政治を頂点にしたピラミッドを構成させるのである。一言でいえば、それは政治至上主義にほかならない。

儒教といえば、すぐ道徳を連想するように、それは道徳の教である。儒教は『大学』の言葉を借りると「身を修め、家を斉える」ことから出発する。その意味では、個人道徳の教であり、家族道徳の教である。しかしそれで終わるかといえば、決してそうではない。「身を修め、家を斉える」ことは、必ず次の段階である「国を治め、天下を平らかにする」ということに結びつかなければならない。それは個人道徳や家族道徳を延長して、国家や天下におしおよぼすということであるが、結果からみれば、道徳の限界を越えて、政治の世界に突入することである。しかも修身斉家は治国平天下に至って完成するというのであるから、道徳は政治を究極の目標とするといってよい。この意味で、儒教は道徳の教であるとともに、それ以上に政治の教であり、政治至上主義の教であるといえよう。

この儒教の政治至上主義は、中国文化の性格に決定的な影響をあたえたといってよい。中国の文化は、一言でいえば政治文化である。学問・芸術・宗教などの文化は、すべて政治を頂点とするピラミッドの底辺におかれる。それだけではない。これらの文化は、それ自身の独立した価値をもつことを許されず、「どの程度までそれが政治に貢献するか」という尺度によって、その価値が決定されるのである。ここでは文化の独立は認められない。

わかりやすい例をあげれば、わが国の江戸時代の小説がある。儒教の支配が強かった江戸時代では、文学が文学としての独自の価値を認められず、勧善懲悪という道徳ないし政治にたいする貢献によって、わずかにその存在を認められたにすぎない。これは中国でも同様であり、小説は文字通りに小さな説で、肩身のせまい思いをしていたのである。そもそも儒教の経典の一つである『詩経』でさえ、その例外となることができなかった。詩経は古代の歌謡を集めたもので、そのうちには恋愛をテーマにした民謡なども含まれている。これを儒教の経典として採用すると、まことに都合の悪いことがおこる可能性がある。そ

こで漢代の注釈家たちは、こじつけの解釈をし、むりやりにこれを道徳や政治に結びつけようとした。どうしても結びつかない場合には、「聖人はこのようなことをしてはならないと教えられたのである」といった苦しい説明をしている。

総体に中国では、王朝の支配力が強く、したがって儒教精神の盛んな時代には、文学・芸術・宗教といった文化が衰え、反対に儒教が後退した時期に文化が栄える、といった現象がみられる。

たとえば漢代四百年間は、始めて大帝国の統一が完成した時期であり、インテリの政治的関心が強く、したがって儒教精神も盛んであったが、そのかわり文学芸術や哲学宗教の分野では、ただ一つの例外である『史記』を除いて、見るべきものがまれである。近ごろ発掘される漢代の絵画や彫刻には優れたものがあるが、いずれも無名の工人の手になったものであり、当時のインテリにとっては、装飾品ではあっても芸術品ではなかった。また宗教といえば伝統的な民間信仰があった程度で、インテリの大部分は無信仰の状態にあった。後漢の初期に仏教が伝えられたものの、宗教不感症ともいうべき漢代のインテリには無縁のものであった。ひとくちにいって漢代は政治文化の時代である。もしこのような状態がそのまま二千年もつづいたとすれば、中国文化はおそらく無味乾燥で魅力のないものになっていたかもしれない。

幸いなことに儒教にもおのずからな盛衰の波の変化があった。漢代につづく六朝隋唐の七百年間は、インテリの政治的関心が低調になり、したがって儒教精神が衰退した時期であるといってよい。六朝についてみると、これは漢代の儒学至上主義とは反対に、文学至上主義の時代である。また絵画・彫刻・書道などの芸術の世界にも一流のインテリ作家が進出し、従来はたんなる技術であったものを芸術に高めるといった現象がみられる。また思想界においても儒教に代わって老荘思想が全盛を極めるようになり、宗教界でも民間信仰を組織化した道教が成立し、また漢代いらい凍結されたままになっていた仏教が爆発的に上下にひろまるようになった。

なぜこのようになったかといえば、それは六朝のインテリが政治に関心を失ったことによる。中国のインテリは同時に官吏であり、政治家であるという伝統をもつが、六朝のインテリは貴族化して、その身分が安定するようになった。つまり王朝の支配にたいして、ある程度までの独立性をもつようになったのである。このようなインテリ貴族は、もはや漢代のインテリのように王朝に忠節をつくす必要を感じない。このことが天下国家の政治にたいする関心を冷却させ、逆に文芸や宗教に人生の生きがいを求めさせることになったのである。

六朝につづく隋唐は統一王朝の時代であるが、インテリの貴族的性格はそのまま維持されたので、儒教の不振と文芸および宗教の隆盛という六朝の風潮は、ほとんど変わるところなく引きつがれた。次の宋代になると、一変してインテリの貴族性が清算され、本来の官吏としての性格が回復するとともに、ふたたび政治的関心が高まるようになった。そのあらわれが朱子学という新儒学の誕生であり、その失地回復が進むにつれて仏教の衰退が始まった。さらに元明清になると、その王朝の創業期は別として、太平がつづいて爛熟期に入った段階では、インテリの政治的関心が薄れ、同時に豊かな文化が生まれるというリズ

ムを繰りかえしている。

このように見てくると、儒教は「人生において最も価値あるものは政治と道徳である。学問・芸術・宗教といった文化は、両者に貢献することによって、始めてその価値が認められる」という価値観の上に立っていることがわかる。

それでは、他方の共産主義の価値観はどうであろうか。

共産主義の哲学的基礎は唯物史観または経済史観とよばれるように、いちおう経済を価値のピラミッドの頂点におくように見える。しかし実際には、階級闘争を通じてプロレタリアの独裁の実現という「政治」に最高の価値を認めているといってよい。つまり政治至上主義である点において、共産主義と儒教とは完全に一致するのである。

もちろん同じく政治といっても、儒教は「天下国家のために」といい、共産主義は「人民大衆のために」といい、その内容は百八十度の違いをもつともいえよう。しかし同じ儒家でも、たとえば孟子などは「民、貴しとなす。社稷、これに次ぐ。君、軽しとなす」といい、民のための政治をしない君主は、もはや君主としての資格を失った者であるから、これを追放してもよいし、殺してもよいといい、革命を是認しているのである。したがって両者の相違は、それほど本質的なものではないともいえよう。

それはともかくとして、価値のピラミッドの頂点に政治をおき、その下に経済・学問・芸術・宗教をならべ、すべては政治の支配を受けなければならないとする根本態度において、儒教と共産主義とは驚ろくべきほどの一致をしめすのである。

共産主義が学問・芸術・宗教などの文化をどのように考えているかは、今日の中国やソヴィエットを見ればわかるはずである。学問や芸術は「人民大衆の利益」に奉仕すべきものであり、「真理のための真理」や「芸術のための芸術」などという独走は許されない。宗教に至っては、おくれた民衆の要求があるために、「必要悪」として残されているにすぎない。これは昔の中国のインテリが無知な民衆の道教的信仰を、あわれみとさげすみの目で見やっていたのと、全く同じ態度である。

戦前の日本の共産主義運動についてみても、昭和の初期にいわゆるプロレタリア文学が全盛を極めたことがあった。そのばあい文学作品の価値の高さを決定するものは、それが芸術的にすぐれていることではなくて、「プロレタリア階級の革命意識をどこまで高めるか」ということにあるとされた。これは戦時中の軍部が文芸に「戦意の高揚」を求めたのに似ている。

このプロレタリア文学の全盛期に、作家の正宗白鳥は「あんな貧乏たらしい小説を、小説読みの若い者がいつまでも飽きずに読むはずがない」と言い放った。戦後、共産主義は昔にまさる勢いを盛りかえし、さまざまなことが復活したが、さすがにこのプロレタリア文学だけは、ついに復活せずに終わりそうである。正宗白鳥の予言が適中したのである。

もっとも、このプロレタリア文学の後身ともいえるものが中国で誕生した。それは「人民文学」である。念のために『毛沢東語録』の一節を引いてみよう。

われわれの文学・芸術は、いずれも人民大衆のためのもの、何よりもまず、労働者・農民・兵士のためのものであり、労働者・農民・兵士のために創作され、労働者・農民・兵士によって利用されな

ければならない。

文学・芸術は、人民が一心同体となって敵と戦うのを助けるため、人民を結集し、人民を教育し、敵に打撃をあたえ、敵を消滅させる有力な武器として、革命という機械の部分たらしめなければならない。

このような政治至上主義は、中国では二千年の伝統をもっているのであるから、日本などと違って、はるかに抵抗なくインテリにも受けいれられるものと思われる。

三

儒教と中国の共産主義とが共通する第二点は、政治と道徳とが一体であり、不可分の関係にあることである。

昔から中国の支配者は、たんなる政治家ではなく、最高の道徳をそなえた聖人でなければならなかった。「聖王」の思想は、中国の歴史とともに古い。中国で「政治」という語が用いられるようになったのは新しく、古くは「政教」といった。それは政治であるとともに教訓であり、教育である。王者は政治上の支配者であると同時に、すぐれた教師でなければならなかった。

これは近代国家の政治家の概念とは、大きく異なったものであろう。政治と道徳とが分化した近代社会では、政治家に高い道徳を求めないのが原則である。現在の首相がわが国最高の道徳的人格者だなどと思うものはないであろうし、そのような要求をもつものも少ないであろう。もっとも、あまり悪どい金もうけをしたり、対立政党の機密を盗聴させるなどという不法なことをすれば、その辞職を求めるということは大いにありうる。しかし、その場合でも政治家に聖人君子であることを求めているわけではなく、悪人でないことを求めているにすぎない。もし政治家に最高の道徳を求めるならば、現在の国会議員は総辞職しなければならないであろうし、反対に政治的能力のない人格者を首相や議員に選んだならば、わが国の政治や経済はたちまち破局に直面するにちがいない。政治と道徳の分業、それは近代国家の条件である。

ところが中国では、まだ二千年来の儒教の伝統が重くのしかかっているようである。つまり最高の政治的地位にあるものは、同時にまた最高の道徳家——聖人でなければならぬという要求があるようにみえる。このため毛主席は中国最高の政治家であるとともに、道徳的に完全無欠な聖人であると信じられている。それならばこそ、かれの一言一句は、かつての孔子の『論語』がそうであったように、『毛沢東語録』として万能の威力をしめすことができるのである。過去の中国の天子がそなえていた宗教的権威（カリスマ）を、毛沢東はそのままに引きついでいることになる。

そればかりではない。政治が学問や芸術を従えるという、まさにその理由によって、過去の中国の最高の政治家は、同時に学者であり、文章家であり、詩人でなければならなかった。日本のように講談や浪花節が好きというのでは、中国では大臣が勤まらないのである。その意味では、現在の世界各国の元首のうち、中国の元首が最もしんどい条件を背負わされていることになる。このため毛沢東は『矛盾論』という哲学の書をあらわしたばかりでなく、文章や詩にも優れた能力をしめすとともに、時にはオリンピック・レコードを破る速度で揚子江を横断するという、超人ぶりをしめすことにもなるのである。

（文学部教授）